

上越	土樽から平標山・三国峠	No.070
----	-------------	--------

巻機山で出会った三人の女性達と、上越の山へということになった。男は私一人だったが……。

我ら山登りの仲間を少しでも増やそうという動きから、クラス会の席上で数人の旧友に誘いをかけてみた。その結果、(半ば強引に)石関・佐藤の二人に、「ウン」と言わせたような形で仲間入りが決まった。この二人にまずはのんびりした山歩きから始めてもらい、気が向いたら続けばいいだろうということになった。そして、今回の女性同行の旅ならばどことなくリラックスできて良いのではなかろうか、という判断から「俺の友達が三人一緒だけどう？」と持ちかけてみた。

昭和41年9月14日

新しいマシンの講習を受けている最中の休日で、しかも休み明けの16日は週に一度の試験の日。何とはなしに図面や機械のことが頭から離れないが、とにかく山を最優先。佐藤君は風邪をひいて欠場となってしまったので、バナナを持って見送りに来てくれた。(これがきっかけで彼は「バナナ」と呼ばれることになった)

石関の上野駅到着時の第一声は振るっていた。

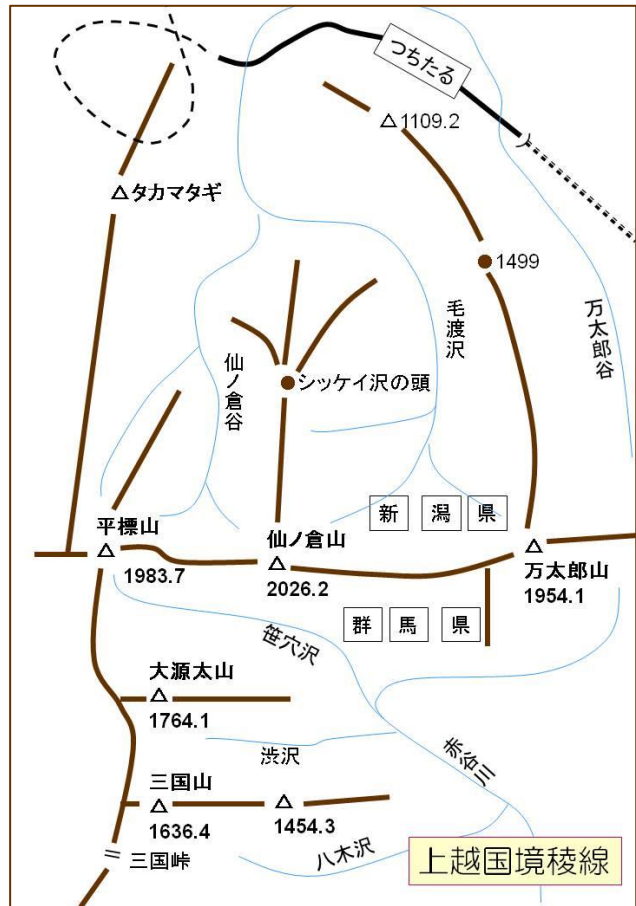
「なーんだ、友達って女の子か、だったらもっという

服着てくれば良かった」。こちらの服装は、アテツギのある痛んだニッカーだというのに。

そんなわけで、メンバーは足掛け三ヶ月ぶりの太田さん、阿部さん、野中さん、それに石関で計5人。

会社から帰って15分で支度をしてきたので、食料は何もない。駅でホットケーキを購入。

上越線の夜行列車、23時58分発車。列車は比較的混んでいて、座席には女性陣を座らせて、私は馴れた床で伸び伸びと横たわった。



昭和41年9月15日

新しくできた祭日、敬老の日。5時過ぎに土樽に到着。雨が腰を据えて降っている。駅舎の中で朝食をとり、小雨になったところで5時35分に出発。歩き出すとまた降り出し、結局ポンチョに蒸されて歩くことは避けられず。上越線のガードを潜り抜けて、仙ノ倉谷に沿った道に入る。途中、飯場の前でわなにかかって必死にもがいている狸がいた。狸の目は真っ赤で、しかも涙も乾いて虚ろになっていた。我々に助けを求めるような目つきにも見えたが、なすすべはなし。許してください。

登りが半分ほど終わったところは晴れ間の見え出した谷間に西ゼン、東ゼンのスラブが顔を出し、素晴らしい眺めだ。眺めを楽しみながら佐藤君からの差し入れのバナナを食べたが、何本かがつぶれてキジのようになってしまった。止む無くじゃんけんで分けて食べた。(誰がつぶれたバナナに当たったかはメモがないのでわからない) 稜線が近くなると上越の山の特徴である草原と池塘が現れ、晴れ間が出てきた空の下誰言うともなく小休止。

平標山頂上(1983.7m)11時35分微風ありわずかながら肌に冷たい。風のない草原で昼食。越後側の景色は駄目だが上州側は段々に去っていく雲の下に、浅間・妙義・武尊、それにハケ岳らしきものも。なんと

踏み跡 < My mountains >

言っても仙ノ倉山につながる稜線の緑は口でも絵の具でも表現できそうもない素晴らしさ。これは仙ノ倉色としか言いようがない。ここから三国峠を指して南に伸びる稜線をたどる。

三国山口15時、三国山は稜線から東に張り出しているの、ここからピストン。

三国山(1636.4m)まで来ると、今までに見え隠れしていた谷川岳から万太郎、仙ノ倉、平標と続く国境の稜線が鮮やかに見え出し、下山前の最後の喜びを提供してくれる。15時30分出発。

三国峠(1300m)から群馬県側に下り、トンネルの上州口に16時10分に到着。バスを待つ間にレストハウスでラーメンを食べて空腹を鎮める。佐藤君に土産を買い、17時の後閑行に乗車。(140円)

猿ヶ京温泉の近くではもう紅葉し始めたところもある。後閑駅着は18時10分、上り列車は18時20分発、高崎で急行草津に乗り換え、家に着いたら23時だった。

以上



左上:三国峠への下り(正面は大源太山)

右上:三国峠への下り

左下:平標山頂上

*註:平標山の高さ

この山行の頃には1983.7mだったが、
2023年の国土地理院の地形図では1983.8mとなっている。

(修正・更新:2023年11月)